

『マコはハルモニア・ムンディにのって踊る』(10)「聖なる耳と命の木」

ロクスひよりやま キャプテン 中井 淳 SJ
(旧下関労働教育センター イエズス会神父)



「希望牧場の牛さんたちのあの目を忘れることができないんだよね。」マコは、高校生たちに自分の小学生の時の記憶を分かちあった。避難勧告が解除され、故郷に一時的に戻った。そのおりに、幼い時から両親が時々連れていってくれた南相馬の牧場を再び訪れた。皮膚にできものが出ている牛たちが放射能で汚染されてしまった草を食んでいる。車中では父がガイガーカウンターで放射能の数値を確認していた。ただ死を待つしかない牛たちの悲しそうな目…。

2011年、マコは家族と共に西方に移住した。その町にあるカトリック学校で中高時代を過ごした。今、その学校で、マコは自分のエコロジーの活動について生徒たちに分かちあっている。瀬川神父さんが特別授業を時々担当しているのだが、その関係で今回はマコが講話を依頼されたのだ。マコは、『植物と叡智の守り人』という北アメリカ先住民の植物学者が書いた本を紹介した。手に取った瞬間からこの本に恋をしてしまった。マコにとって特別な、エコロジカルな旅路へと誘ってくれた本なのだ。この著者は語る。今わたしたちは帰路に立っている、と。この先は道が二つに分かれている。「片方の道は草が生えたばかりで、やわらかい緑色に覆われている。裸足でも歩けるくらいだ。もう片方の道は真っ黒に焼けこげて硬く、裸足で歩けば燃えさして足が切れてしまう。」私たちは「緑の道」を選べるだろうか。生命が続いていくことのできる道を。その分かれ道は丘の頂上にある。その丘の下に広がる谷では、目覚めた人々が、集めたものをまとめた荷物を抱えて分岐点に向かっている。その荷物の中には、世界観を変容させるための貴重な種が入っている。その目覚めた人々の声が聞こえてくる。「来た道を戻り、道の脇に置き去られたものを拾い集めなさい。」

「私は多分、今この、置き去られたものを一つ一つ拾い集めて袋に入れていく旅路を歩いているのだと思うの。」生徒たちは、なんだか不思議な話を聞くような表情をしているが、真剣に聞いてくれている。マコは、心の袋の中に入れた一つの種について分かちあった。それは「聴く」ということ。人々の叫びを。大地の叫びを。あの牛さんたちの叫びを聴くことのできる“聖なる耳”を育ててゆくこと。「私もまだその旅路の始まりにいるに過ぎないけど、旅を続けながら拾い集めたものを、これからここに来るたびにみんなに分かちあっていくね。」



授業後、生徒たちとの対話の喜びの余韻を感じながら、マコは懐かしい校舎、一つ一つの大切な場所を、中高時代の記憶を振り返りながら巡っていった。シスターたちのお墓のところに来る。イエスの十字架がその奥に、森の木々の一部であるように峻り立っている。ヒルデガルド・フォン・ビンゲンというエコロジーの守護聖人と呼ばれている人にとって、十字架とは「命の木」トゥリー・オブ・ライフの意味を持っていたということをおぼろげに思い出す。十字架は、すべての被造物がつながりあっている、その壮大な交わりの中へと謙遜に参与していくこと。この森の中の十字架は、あの牛さんたちの叫びを聴き、連帯している命の木。牛さんたちの命を決して朽ちるだけではなく、新しい命へと変えていく希望の木。今、10年の歳月を経ながら、懐かしくも新しい眼差しでその十字架を見つめているマコがいた。(つづく)

★カトリック広島教区 ハラスメント相談窓口：広島教区人権擁護デスク★

受付時間 木曜日(祝日を除く) 9:00~16:00 電話番号 082-555-1127

メール：desk-hiroshima@catholic.hiroshima.jp

H・Social**H・Social**H・Social**H・Social**H・Social**H・Social

発行 カトリック広島教区 平和の使徒推進本部 正義と平和推進デスク

TEL：082-221-6613 FAX：082-221-6019 E-Mail info@social-desk.net